

令和3年3月5日

学振特別研究員申請者の指導教員へのお願い

研究大学強化促進事業実施委員会委員長
長坂徹也(工)

これまで本学では、学振特別研究員を申請する学生に対し、説明会の開催、過去の実績の統計データ提示、ノウハウをまとめた資料の配布等の情報発信に加え、個別相談会、面接審査時の発表練習会等を開催して後方支援を行ってきました。このような組織的努力が奏功したのか、分野による若干の高低差はあるものの、本学の採択率は高位で安定的に推移しており、分野によっては全国一の実績を残しているところもあります。

このような組織的支援活動の中でノウハウを積み重ねてきましたが、極めて明確になってきたことは、**指導教員の直接指導に勝るものはない**、ということです。例えば、面接審査時の発表練習の際に、指導教員に同席して頂き、フォローアップを受けた学生の採択率は、当該学生のみが出席した場合に比べ、間違いなく高くなっています。

指導教員の直接指導によって内容が大幅に改善された例を示すと、以下のようなことがあります。

- アドバイザーが急所を突く助言をしたものの、肝心の学生ご本人が具体的にどこを修正すべきか理解できなかった。⇒ 指導教員はたちどころに指摘点を理解し、学生に納得させた上での確な修正指導を行った。
- アドバイザーと学生の間のやり取りに食い違いがあった(①学生のキャラクターによる場合) ⇒ 学生の気質をよく知る指導教員は、学生に得心させて的確にアドバイザーの助言を反映させた。
- アドバイザーと学生の間のやり取りに食い違いがあった(②専門分野が異なる場合) ⇒ どこまで専門色を薄めてよいか判断しかねる学生に対し、指導教員はサイエンスメリットを担保しつつ、専門外の人でもわかる平易な表現に修正させた。
- アドバイザーと学生の間のやり取りに食い違いがあった(③複数のアドバイザー間で助言が異なる場合) ⇒ 指導教員は助言の本質を即座に理解し、最も的確でインパクトがある修正案を学生に提示し、申請書に反映させた。

繰り返しになりますが、指導教員による直接指導に勝るものはありません。採択率につきましては、本学は大変健闘していると言えますが、**申請数については博士課程在籍者数から見るとまだまだ不十分**です。特にDC1は、申請数、採択者数を大幅に増加させる余地があります。新型コロナウイルス感染症対応で何かと不自由をされているとは存じますが、益々のご指導とエンカレッジのほどよろしくお願い申し上げます。

なお、先日公開された特別研究員公募要領によれば、令和4年度はコロナの影響のためか、二次選考については面接選考が行われず、書面審査・合議審査により採択・不採択の判定がなされるとのことです。すなわち、申請書類の書きぶりの重要度が増すこととなり、実績アピールと説得力のある実績見込みがキイとなります。そのため、先生方のご指導が決定的になりますので、何卒よろしくお願いいたします。